ペトリフレックス・セブンの謎

安藤 嘉信

① ペトリフレックスセブン（Aタイプ）の前面
セルフタイマーレバー，シャッターボタンリング，
巻戻しノブ等の外装部品は1961年ペンタV2のものが共用されている。

② ペトリフレックスセブン（Aタイプ）の背面
軍艦上面には試作機と同様メーターSW，ON，OFF表示窓がなく，
接眼レンズ枠が丸型である点が他のタイプと根本的に異る。

〈ペトリフレックス7誕生の背景〉

ペトリカメラ㈱の前身は，栗林製作所と言い明治40年（1907）の個人創業以来，小西本店に次ぐ我が国屈指のカメラメーカーとして，古い歴史を刻んできた。（昭和初期合資会社，昭和24年株式会社に改組，昭和37年7月にペトリ株式会社と改称した）

昭和52年10月（1977），不運な結末をもってその長い社史を閉じるまで，70年間に亘って世に送り出してきたカメラの種類・量は膨大なものがあった。

戦前の製品は，その大部分が総発売元となった皆川商店のブランド名称を冠して「ファースト」ネームで広く親しまれた。因みに私が生まれて初めて最初に使ったカメラが，セミファースト（トーコーレンズ付）であった事が今は懐しく想起される。

戦後は皆川商店と訣別し，メーカーブランドとして自立し，世界市場に雄飛を図らんと欲して，初代ローマ法王St．PETERの聖名に因み「ペトリ」と名付けた事はすでに周知のとおりである。

日本人のイメージでは，何やら不潔なものがペタリと粘り付いてくるようで気持ちの悪い語感ではあるが，敢えてそのようなフィーリンゲを無視して，思い切って外国受けのするペトリと言う呼称を選んだ栗林繁代社長の決意の程が窺われるのである。

戦前戦後を通じてこの一連のファースト及びペトリカメラ群を見渡してみて気付く事は，なぜか独創的なメカ・デザインによるオリジナリティーが極めて少ない事である。

JCII編「日本カメラの歴史」に収録された322機種の中で推薦を受けたセミファースト等6点についてみても，ペトリの長い業歴に比し余りにも進歩的製品数が少ないのみならず，残念ながらその何れもが欧洲製品のでッドコピーに等しいものばかりなのである。

模倣品を安価に提供し続ける事によって，大衆機市場を醸成し，そこに経営の安定基盤を求めたメーカー側のポリシーとして評価できない訳でもないが，今日コレクション対象として改めて見直した場合，メカマニアにとっては総じて魅力に乏しい事がペトリカメラコレクターを増やせぬ大きな原因のようにも思われる。

しかし，ただ1点その例外的存在として，私はペトリフレックス7を挙げておきたい。

スペックの面からのみ比較すれば，当然後続のFTシリーズの方が遙かに進歩しているのだが，“セブン”には従来の消極的社風から脱皮して，何とか先手を掴もうと苦悩努力し，そして意及ばず敗れ去った影のドラマが宿っているように感じられるのである。

クラカメコレクションの醍醐味は，ただ稀少品を数多く占有するだけが総てではなくこの陽の当らぬ影の部分に知られざる新らたな謎を発見した心の感動にもある。

セブンに秘められたドラマを，社内資料に基き，或は当時開発に携った方々にインタービューし客観的に立証する事はすでに不可能となってしまった今，私は手元のコレクションの現物を透視して，多少の独断を交えながら後付けしてみたいと思い立った。

ペトリペンタシリーズ，及びセブンに関しては，これまでにも仲田元亮氏が先鞭をつけて本誌上に貴重な研究成果を発表しておられるので，本稿では敬意を表しつつその一部を引用させて戴き，蛇足ながら私見を追加して行きたいと思う。

ではまず，ペトリフレックス・セブン誕生に至るまでの，メーカーの動向を追ってみる事にしよう。

合資会社栗林写真機製作所は，戦災で本社工場を焼失したが，終戦後の立ち直りは早く，昭和21年には最初の自社ブランド製品である「クリ」を発表して再スタートを切った。

次いで完成した新工場では，当時では珍らしかったベルトコンベアー組立方式を導入して，一貫量産態勢を整えた。

また併せて輸出体制の強化，海外マーケットの開拓にも努め，ニューヨーク，カナダ，オランダに拠点を築いた。

だがその新製品群を眺めると，クリ，ロルビー，ペトリ，カロロン等戦前同様にオリジナリティーに欠けた時代遅れの大衆機が中心であって，企業体質と言うものは一朝一夕には仲々変らぬもののように見受けられた。

注目すべき35ミリ1眼レフの分野では，1959年にペトリペンタが発表された。

ニコンF，キャノンRと同年の発売であり，出足は素早やかったものの，その性能はプリセット

絞り，シャッターダイアル廻転型と言う，2年以上も昔のレベル（ペンタックスＡＰの頃）に，逆戻りしてしまった感は否めなかった。

セールスポイントに乏しいペトリペンタでは，破格の廉価で衆目を驚かせたとは言いながら，競合激しい海外市場において東西ドイツ製品と対抗して行く事は容易ではない。

本格的に米国市場で成功する為には，戦略的な輸出専用モデルの開発が急務であった。

デザイン，クオリティー，プライスの綜合パフォーマンスにおいて，ペトリのイメージアップに結び付く斬新的な高級機が待望された。

急速な技術革新が進行中のカメラ業界では，丁度その頃セレン光電池に変えて，より高性能なCds 素子を活用した露出計連動方式が研究されていた。

㈱栗林写真機械製作所でも，従来のペトリペンタを改良した国内市場向け大衆版のＶシリーズとは別系列に，全く新しいコンセプトのもとに，Cds の先端技術を導入した高級機「セブン」の設計が秘かに進行していた。

Ｖ２の発表から約２年遅れて，1963年になってやっと異形な姿を現わしたペトリフレックスセブン（オリジナル）の進歩性を証明する為に，当時の他社製品（Cds組込み１眼レフ）のスペックとを次表に取纏め比較してみよう。

〈cds露出計連動式1眼レフの発売順位〉

カメラ名	発売年月	cds露出計測光方式	価格
ミノルタＳＲ－7	1962，7	外部測光式，シャッター速度片連動	51,500円
ヤシカＪ－3	1962，12	同上 ―〃―	33,500
◎ ペトリフレックス7	1963，1	外部開放測光，シャッター，絞りと両連動	41,000
トプコンＲＥスーパー	1963，5	ＴＴＬ開放測光，―〃―	63,500
キャノン ＦＸ	1964，4	外部測光式，シャッターと片連動	46,800
アサヒペンタックスＳＰ	1964，7	ＴＴＬ絞り込み測光，両連動	42,000

この表から判るように，カメラの進歩発展のワンステップとして，Cds露出計内蔵によるシャッタ速度との片連動（ＡＳＡ感度設定とも連動）方式を最初に考案したと言う事で，ミノルタＳＲ－7が「日本の歴史的カメラ」と認定されている。

この実績に準えるならば，ペトリフレックスセブンはそれを更に一歩進めたCds両連動方式を考案した最初のカメラとして，当然「歴史的カメラ」としての栄誉を受けるべき資格があった筈だが何故か推挙されていない。

技術的レベルでは一段低い世評に甘んじてきたペトリカメラ㈱が総力を傾けて，難問とされていたレンズ側の開放Ｆ値，絞り値，及びフィルム感度の情報をボデー側cdsメーターに伝達する独特な方法を編み出したセブンは，後発のトプコンＲＥスーパーが世に出るまでの余りにも短いたった4カ月間ではあったにしても，それは疑いもなく国産ペンタ１眼レフのトップレベルの座に躍り出た事実をこの際特記しておかなければならない。

ではペトリフレックスセブンの概要を知る一助としてその諸元表を次にご紹介しよう。

（ペトリフレックス7の諸元）

項　目	摘　　要
形　式	ペンタプリズム固定式　35ミリ　1眼レフ
標準レンズ	C.Cペトリ　55ミリF1.8（4群6枚）絞り値連動レバー付専用レンズ。マニュアル絞り込み切換えレバー付　マウントはボデー側ブリーチロック付スピゴットマウント方式
シャッター	布幕フォーカルプレーン4軸式　B，1～1/1000　シンクロ　1/60以下（X接点）。シャッターダイアル倍数系列1軸不廻転式。セルフタイマー付。
ファインダー	スクリーン中央部2重矩形枠内にマイクロプリズム，外周は同心円パターン。コンデンサーレンズ付。
フィルム巻上げ	レバー式180度ワンストローク，セルフコッキング。カウンターセルフキャンセル。
測光方式	cds露出計内蔵外部開放測光。メーターSWはフィルム巻上げと連動ON。指針はファインダー内定点合せ式，絞り，シャッター速度，ASA感度（10～800）に連動。
寸法・重サ	W　H　D　　重サ 155×100×95ミリ　950g
発売年月・価格	輸出開始　1963年1月説　　価格不明 国内発売　1964年6月　　41,000円

セブンの派手な外観は一見してそれと判るように，アメリカ人好みにデザインされている。

当時アメリカの工業デザインは，自動車，建築様式，或は電化製品が象徴しているように，直裁的な角張ったダイレクトカットが流行していた。

その流れに便乗するかのように，カメラの分野でもセブンの他にアメリカ側でデザインされた国産カメラでは，ペセラートブコン（REスーパー）アンスコマークM（リコー999），グラフイック35ジェット等，みな鋭角線を強調したデザインのものが専ら輸出されていた。

セブンが米国人デザイナーの手に成ったとする証言はないが，少くとも発売から1年半の間は米国市場に的を絞り，その全量が輸出に向けられていた事実から考えても，ペトリ側の熱い意気込みが想像つこうというものである。

本機が1966年12月に生産終了するまでの，実に3年11カ月の長期に亘るロングラン商品となった事は案外知られていない。

ペトリのその他モデル，或は他の多くのメーカーが1～2年の目まぐるしいサイクルで，次々と新型モデルを発表して行く慌しい動きの中にあって，このセブンの息の長さはニコンFに次いで記録的とさえ言えるだろう。

それでは定めし数も売れたかと思えば，ロングラン必ずしもベストセラーに非ずの例で，国内発売に踏み切った1964年以降も，この進歩的なカメラが内外で好評をもって迎えられたという，華々しい話題はついぞ聞いた事がない。

ペトリはハーフセブン，セブン，セブンS，プロセブン等大衆機セブンシリーズを通じて執拗な程ラッキーセブンの幸運に願いを託してきたがいずれも決勝打とはならず，むしろ次に列記した理由からフレックスセブンは我が国のユーザーからは敬遠見送りされてしまったように思われる。

（フレンドシップ7号に因んで発売されたミノルタのセブンシリーズは大成功を収めたのだが…。）

① 角張った大柄なデザインが威圧感を与えて馴じめない。

② セブン専用の各種交換レンズが発売されず（絞り連動レバー付は標準レンズのみ），アクセサリー類のシステム化が図られていない。

③ 国内発売時点では，すでにＴＴＬ測光時代に入ってきており，ロングランであった事が返ってセブンの進歩性を停滞させてしまった。

④ 複雑なシャッター機構で，設計は優れているもののパーツ類の強度不足が原因で故障が頻発し，しかも修理が難かしかった。（これまで私の収集した10台中何と７台までが故障品）

多分以上のような理由で，国内での販売数量が極く僅かに過ぎなかった為に，昨今ではコレクターにとって，入手困難な希少珍品として追い求められているとは，誠に皮肉な運命と言えよう。反面米国の中古市場には，ゴロゴロとまでは言わないが，決して希少ではなかったセブンが，此頃では日本コレクターの豊富な購買力と業者の高値買いに煽られて，急速に高騰しつつあるようだ。

マッコーン氏はプライスガイドブックの中で敢えて次のようにコメントせざるを得なかった。

「日本のコレクター達によって，ペトリフレックスセブンは珍品高価なものとして扱かわれるようになった」

〈ペトリフレックス７の謎〉

このようにセブンが人気クラカメとして多くの注目を集めるようになってくると，コレクターにとっては一層詳細なデーターが欲しくなってくるものである。

だが，すでにメーカーが倒産消滅してしまった今からでは正確な資料が得られない。そこで次のような「謎」が浮上してきた。

(1) セブンの総生産台数はどの位か

内外において珍品（Rare）と評価され得る為には少量生産である事が一つの条件になる。

その総生産台数を推計する為に，これまで私が収集した10台のセブン（目的の為とは言え，正気の沙汰ではない）と，本誌１２８号で仲田氏が調査された７台のセブンのボデーNoを併せて一覧表に纏めてみると，相当確度の高い答が導き出されてくるのである。

（ペトリフレックス７のＢNo調べ）　◎印は仲田氏の調査資料より引用。

カメラネームの交差型（前期）	カメラネームの独立型（後期）
55281× 55310×　}（最初期型）	◎ 55241×
55509×	◎ 55440×
◎ 55625×	56024×
55729×	56329×
◎ 55763×	56413×
55846×	56509×
◎ 56021×	57330×
	◎ 57519×
	◎ 57730×

注　ＢNoの下１桁は×印にしてあります。

この調査結果によれば，セブンのBNoは550001～578000の範囲内で確認されているので，捨番なしとして最大限に見積って28千台が製られたと算定する事ができよう。

これは月産平均にすれば600台弱のベースで製られた事になる。

ここ数年来，ＩＣＳ加盟店が不動，完動の別なく見付け次第買い漁ってくるおかげで，アメリカから続々と里帰りしてくるセブンの量から勘案すると，この推計は当たらずと雖も遠くないと言う感じである。

勿論，現行カメラが１機種でも月産３万台ベースの規模に比べれば確かに少量生産には違いないが，28千台もあってはセブンを珍品希少と認定するには些か抵抗があろう。だが問題はその残存数量なのであって，市価100$程度の安物カメラと格付されていたセブンは，故障廃棄率が高く，アメリカ市場にも残り少くなったと言われている。大胆な憶測であるが，昨年までの里帰り数量をもって略底をついたと見れば，完動機は３千台を切っているのかも知れない。

(2) セブンには何種類のタイプがあるのか。

月産量は少いにも拘らずセブンの生産期間が約４年と長かった為に，現物を細かく観察して行くと，その間に何種類ものバリエーションが発見される。

私は独自の判断をもってセブンをＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄの４種類に大分類した上で，更に各々のタイプに認められるパーツ類のマイナーチェンジを捉えてみる事にした。

〈ペトリフレックスセブン分類表〉

項目＼分類	Ａ タイプ	Ｂ タイプ	Ｃ タイプ	Ｄ タイプ
ネーム字体	活字体７が交叉型	同　左	同　左（深刻り）	筆記体７が独立型
メーターＳＷ窓	なし	梯型窓	同　左	半楕円型窓
ファインダー接眼部	丸　型	角　型	同　左	同　左
cds受光部窓枠	薄　型	同　左	厚　型	同　左
セルフタイマーレバー	縦溝付Ｖ２共通型	同　左	溝なし　Ｖ３共通型	同　左
巻上げレバー	扁平型	同　左（巻上げ角度英文刻字）	先端脹らみ型	同　左
シャッターボタンリング	杯型ペトリ35共通型	同　左	同　左	井型　Ｖ３共通型
アクセサリーシュー	２本ネジストップ付	２本ネジ縦溝ストップ付	２本ネジストップなし	３本ネジストップなし
背面メーカー名表示	なし	なし	あり	あり
電池室蓋	傘歯光沢メッキ，厚型	同　左	同　左　中厚型	傘歯艶消メッキ，薄型
共通個所	シャッターダイアル，巻戻しノブ，巻上げレバー飾り蓋，ファインダースクリーン			

◎ 各タイプの変り目では部品が混交している事例が認められるので，決定的分類とは言い得ない。

なお以上のような外見上の差異以外にも，分解してみると前期・後期ではシャッター機構，シンクロ機構等内部メカニズムにも若干改良の跡が認められた。

面白い発見として，分類表に示したとおりＡタイプは軍艦カバーにメーターＳＷ（スイッチ）窓がないにも拘らず，鋳造ボデー側にはＢ～Ｄタイプと同様に，ＯＮ，ＯＦＦ表示板を組込む為のシャフト穴がすでに予め穿孔されていたのである。

この事実は，ＳＷ表示板とシャッター巻上げとの連動リンク構造に関する基本設計は当初からすでに完了してはいたものの，実際のシークエンス

がうまく働かなかった為に，この組込みを一時保留し，取敢えず見切り発車したモデルが窓なしのAタイプと言ってもよいであろう。

一刻も早く製品化し発売したいと言うこのような慌しい動きは，新製品セブンに対し当時量産ラインにあったV2型の外装部品をそのまま多数流用している事からも窺れるのである。

(3) セブンの発売時期は何時が本当か。

このAタイプ（B№55281×）に関する最も不可解な謎として，裏蓋内側に貼り付けられた1片の小さな英文のサービスステッカーがある。（但しB№55310×のAタイプ及び以降のB～Dタイプには貼付なし）

これを翻訳すると次のようである。

> あなたのペトリカメラが正常に作動しなくなった時は，どうか下記の場所へ送って下さい。直ちに無料で修理します。このサービスは，保証書がなくとも受けられます。
>
> 株式会社 栗林写真機械製作所
> 輸出部　電話（888）1111-4
> 日本・東京・足立区梅島町1番地

注 このステッカーは，これまでのペトリの輸出カメラに貼布された淡緑・橙色の2色刷りと異り，茶一色の台紙が使われている。

既資料によれば，栗林写真機械がペトリカメラと称号変更したのは，1962年7月である。

セブンの輸出開始に先立つ事6カ月以前と言う事になる。

当然本社工場の表札看板は変更登記完了時には新社名に差し替えられた筈である。以降の郵送物の送達は新社名宛になるよう爾後に発売された新製品の取扱説明書，保証書等は過渡的扱を別にして，当然新社名で発行された筈である。

しかし上記のサービスステッカーを見れば，修理品の送付先は何と旧社名表示のままでプリントされているのだ。

ペトリが莫大な開発費と社運を賭けて完成した新製品“セブン”の輸出に際して，6カ月も前にすでに変更になっている旧社名のステッカーをそのまま貼るであろうか。刷り直しする僅かな費用を惜しんで，既製ステッカーをそのまま貼るであろうか。そのような所業はとても常識では考えられない事である。

この事実は，とりも直さずセブンの輸出開始を1963年1月とした従来説が誤りであって，少くとも旧社名時代（1962年7月以前）から，セブン（Aタイプ）の対米輸出がすでに始まっていた証左となるのではなかろうか。

確かにAタイプのレンズリング上には，ペトリカメラの呼称が先行して表示されてはいるが，ボデーに正式に PETRI CAMERA CO 1NC と社名が刻字されたのは後期のC，Dタイプからであった事実も見逃せない傍証となるであろう。

「写真工業」 1962年11月号（輸出開始の僅か3ケ月前）で，ペンタ前面カバーを黒塗りとしたセブンの試作機（V2用の黒胴F2レンズを仮装着か？）が初めて紹介されているが，以上の証拠に基けばそれでは公表時期が余りにも遅きに失しているのである。

私は本誌173号「アサヒペンタックスAPの謎」及び157号「テレコニフレックスの謎」（註，その後の再調査により，テレヘキサノンレンズ付コニフレックスの製造期間は1955，12月～1956，12月の1カ年間で，出荷総数97台と確認）の拙文中でも触れたように，業界誌，或はメーカー発表記事には色々と他社牽制，営業政策等を折込んだ表裏駆け引きで粉飾されている事例が多く，全面的にはこれを盲信できない事を指摘してきた。

だからアメリカ市場で成功するまでは，敢えてセブンの国内発売を差控え隠蔽しておきたかったペトリ側では，マスコミにスクープされてしまってから今更輸出中の現行品をご披露する訳にもゆかず，渋々と昔の試作機などを尤もらしく持ち出してきて辻褄を合せたのではなかろうか。

そりゃあんた！余りにも勘繰り過ぎではござんせんか……読者からの叱声もあろう。

しかし，もし本稿における私の仮説（輸出開始1962年7月以前）が真実として立証できたならば，その結果はミノルタSR－7の“歴史的カメラ”の栄光は当然キャンセルされ，「日本のカメラの歴史」は海外に英訳頒布された資料も含めて修正されねばならないと言う深刻な事態に発展するかも知れないのである。これはコレクターにとっては無関心事では済まされない事である。

ペトリの内情に多少は詳しい知人にこの件を糺してみたが，当時社内は労使関係，経営人事面で度々紛糾を招き，資料整理も杜撰であった処から，

真相は多分判らないだろう……と言う。ギブアップも止むなしか……。だがこれは大きな「謎」だ！　私は1片の小さなステッカーに誑かされてペトリフレックスセブンに仕組まれていたブラックホールの中に，うっかり迷い込んでしまったのだろうか。

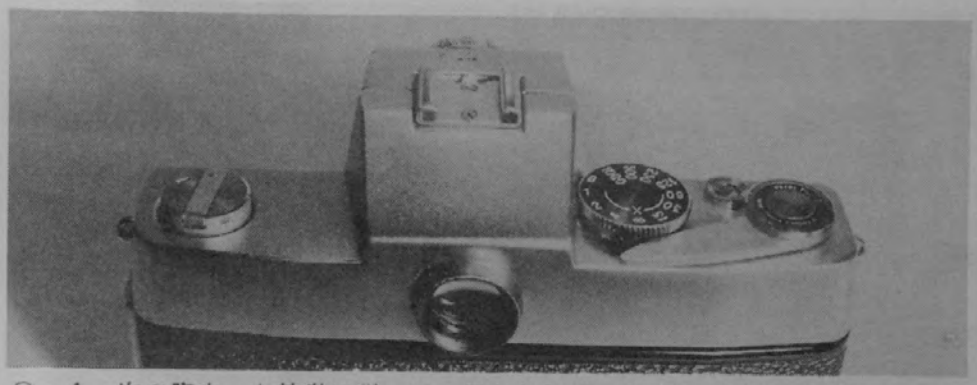
おわり

③　これはAタイプボデーであるが，次のパーツ類は他のタイプと共用している。

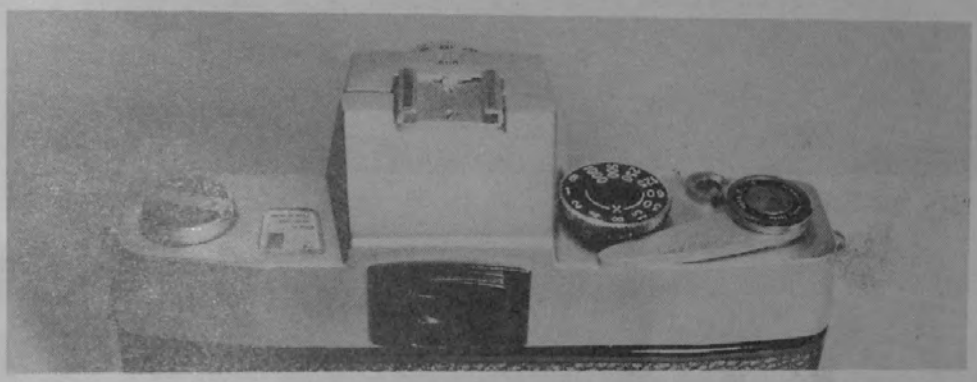
(1)　ＡＳＡ感度設定リング　（A, B タイプ）
(2)　セルフタイマーレバー　（A, B　〃　）
(3)　シャッターボタンリング　（A, B, C 〃　）
(4)　巻上げレバー　（A, B　〃　）
(5)　シャッターダイアル　（A, B, C, D共通）
(6)　巻戻しノブ　（　〃　）
(7)　ネーム交叉型　（A, B, C タイプ）

④　ネーム独立型のＤタイプ専用ボデーであるが，次のパーツ類は他のタイプと共用。

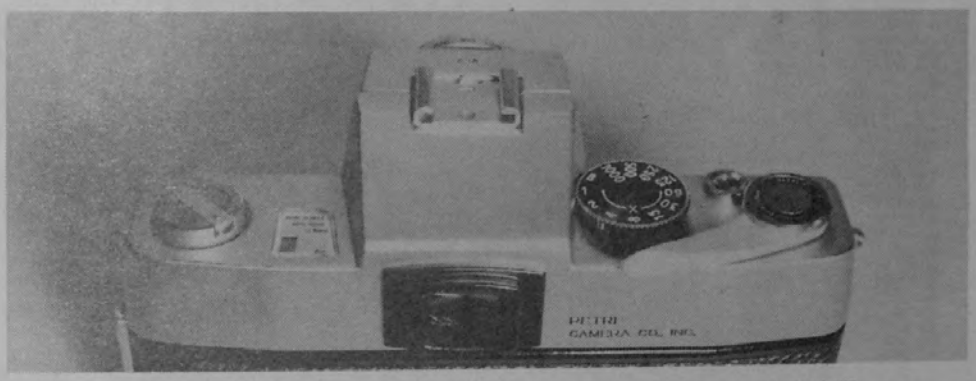
(1)　ＡＳＡ感度設定リング厚型　（C, Dタイプ）
(2)　セルフタイマーレバー　（C, D　〃　）
(3)　巻上げレバー　（C, D　〃　）



⑤－1　次の際立った特徴に従って，便宜上A，B，C，Dの4タイプに分類した。
Aタイプ……メーターＳＷ窓なし，丸型接眼レンズ枠



⑤－2　Bタイプ……梯型メーターＳＷ窓，角型接眼レンズ枠，平板状巻上げレバーにSingle Stroke 180°の刻字入り。



⑤－3　Cタイプ……巻上げレバー先端に脹らみ，背面にメーカ名表示。

⑤－4　Dタイプ……半楕円型メーターＳＷ窓，削り出し製のシュー。
なお各タイプの変り目では，部品パーツ類が混交されたモデルも有り得る。

⑥ カメラネームの7が交叉型 （A, B, Cタイプ共通）。

⑦ カメラネームの7が独立型（Dタイプのみ）。字体も変化している。

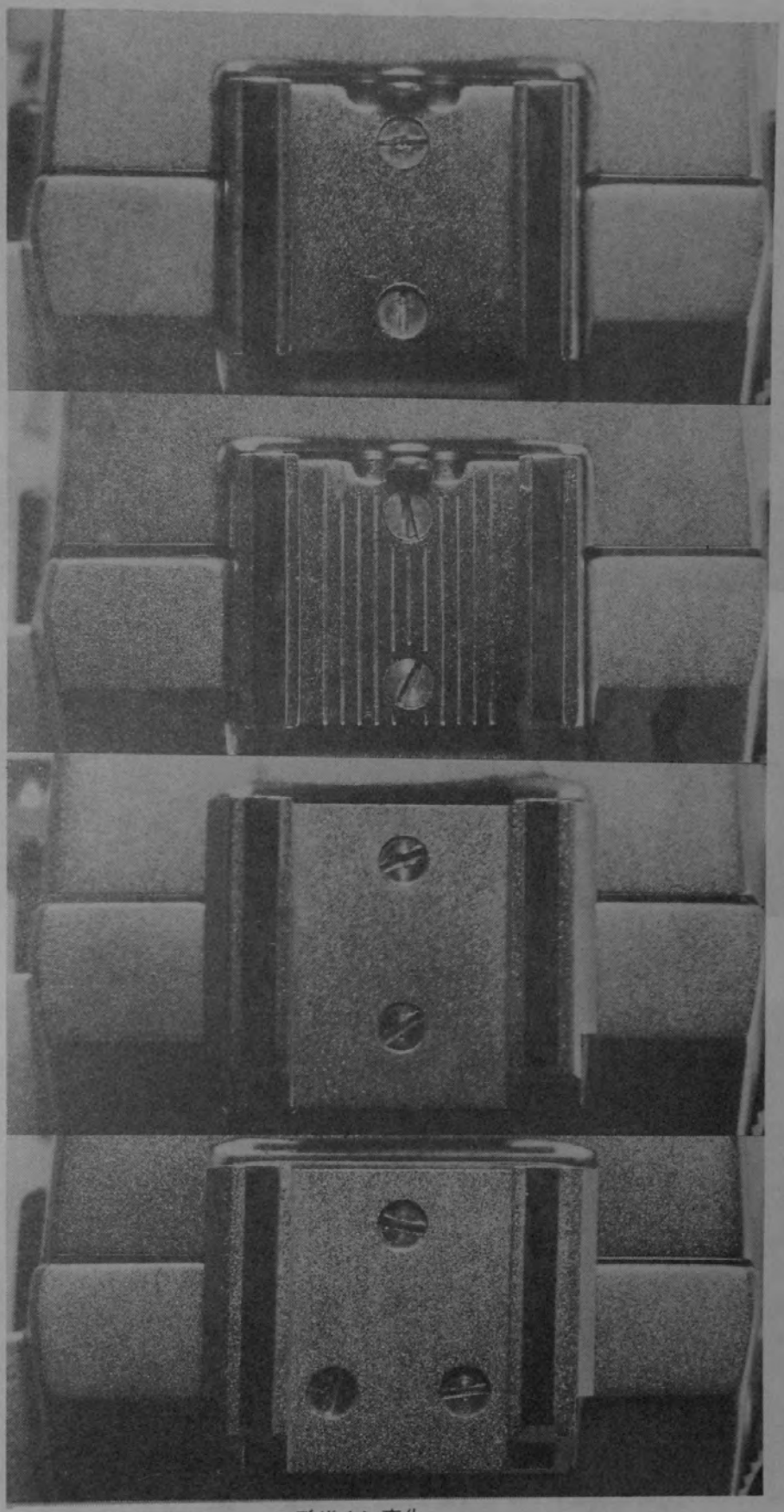
世界中から、
よりいいものを、
より早く。

GIN·ICHI
CAMERA INC.

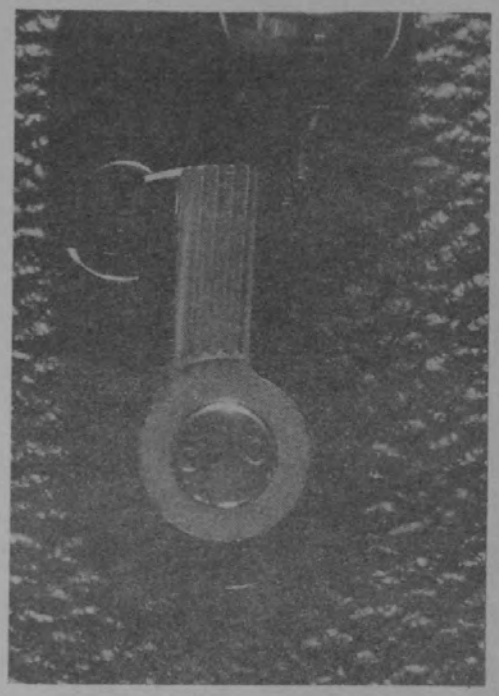
ビンテージ・カメラ
各種カメラ・レンズ
各種カメラ機材
各種チューンナップ
特殊加工・修理
トレードボックス
交換・下取り

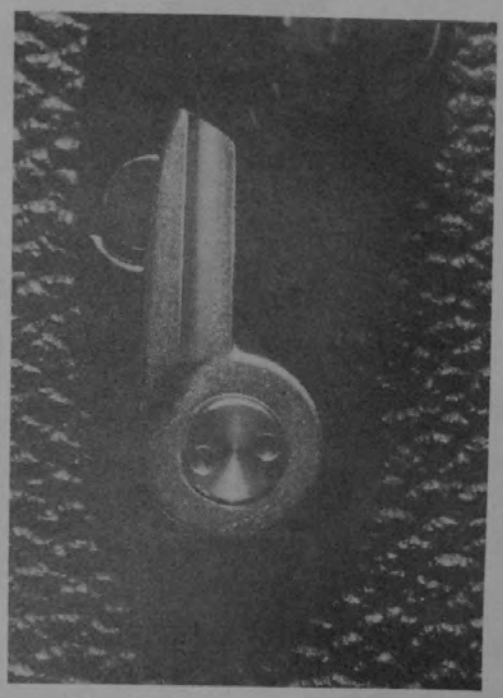
GIN-ICHI

● ギンイチカメラ
プロ用品カメラ・レンズショップ　〒104 東京都中央区銀座1-4-5 土志田ビル1F　TEL 03 3564-1211
営業時間：月曜日～土曜日（AM9:30～PM6:30）で日曜・祭日は休業します

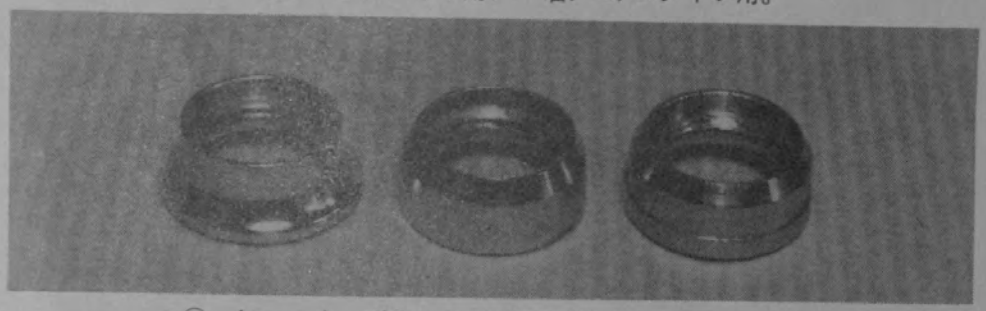


⑧　アクセサリーシューのデザイン変化
上から，A，Bタイプ用，Cタイプ用，Dタイプ2種類の順。
もっと多くのサンプルを調査すれば，更に別の組合せがあるかも知れない。

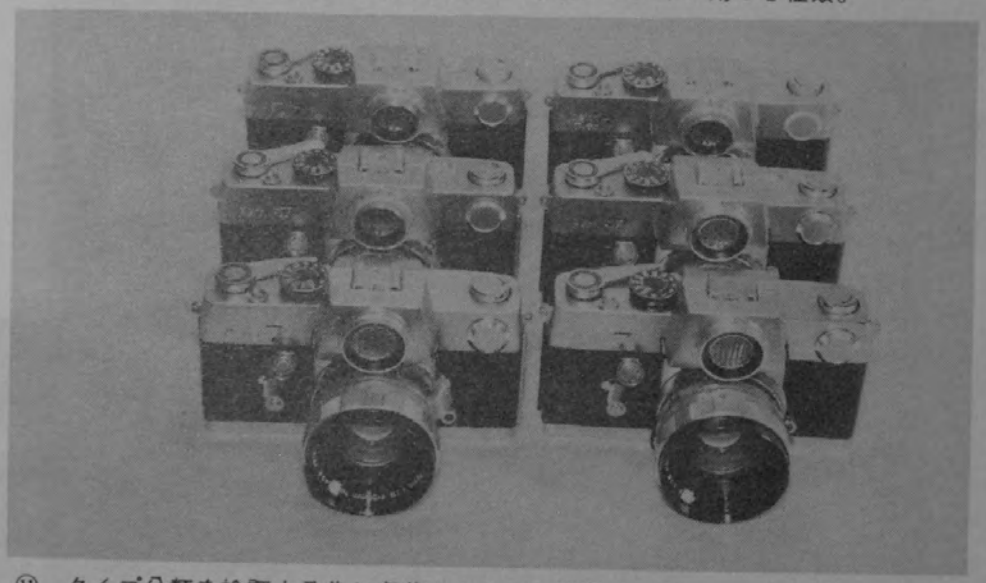




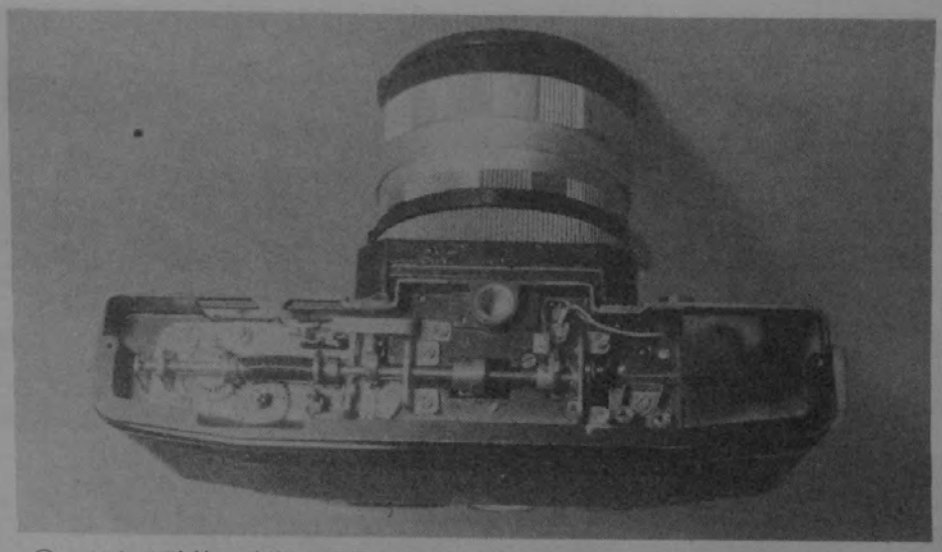
⑨　セルフタイマーレバーのデザイン変化。
左，A，Bタイプ用，　右，C，Dタイプ用。



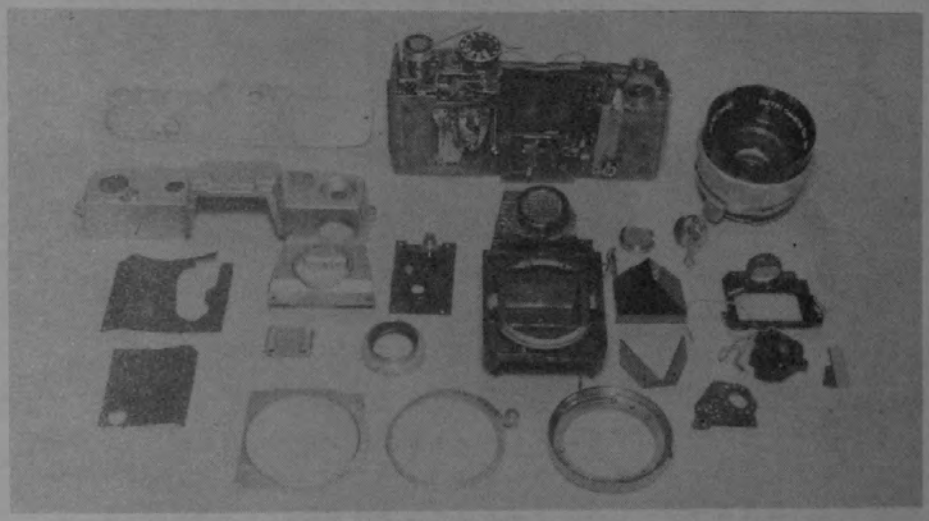
⑩　シャッターボタンリングのデザイン変化。
左，A，B，Cタイプ共用，　中右，Dタイプ用の2種類。



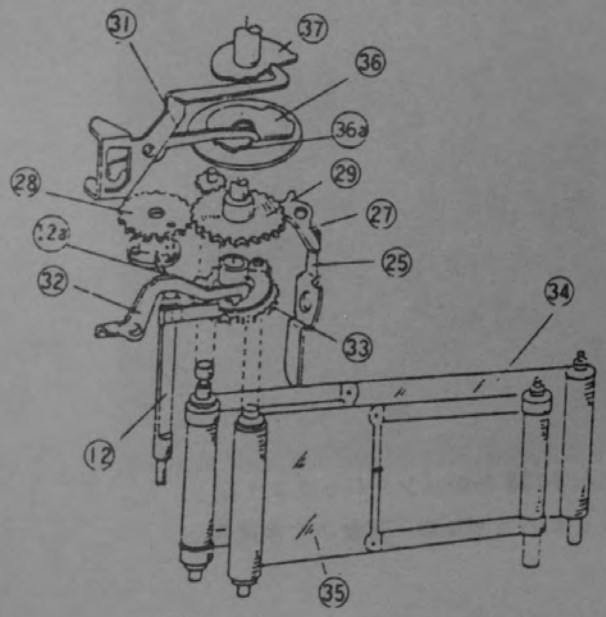
⑪　タイプ分類を検証する為に収集したセブン群団の一部。
詳細に比較すると，全部に相異点が認められた。
Dタイプ最終期にはレンズ名が「C，C　Auto」に変ったものがあった。



⑫　ペトリ独特の底部に組込まれたコントロールシャフトのメカニズム。シャッターを押すとシャフトが1廻転する間に，5ケのカムが絞りレバー，クイックリターンミラー，シンクロ接点の作動を制御する。



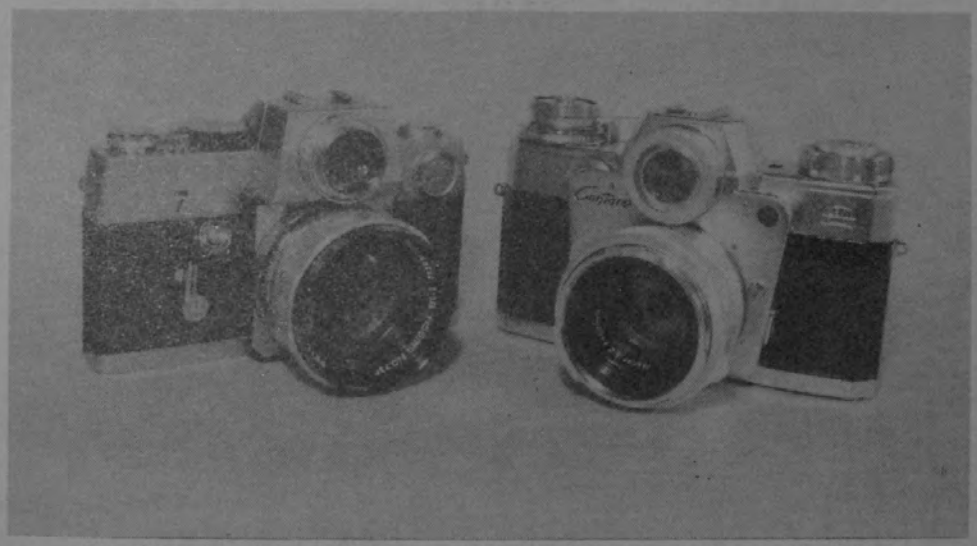
⑬　セブンのシャッター機構は複雑怪奇，且ギヤトレインの剛性不足の為故障が多かった。ここまで分解しないと修理ができず，業者泣かせのカメラであった。



⑭　ペトリフレックス7シリーズに共通の，直線上に平行配置された4軸式フォーカルプレーンシャッターの見取図。幕交換は難作業である。

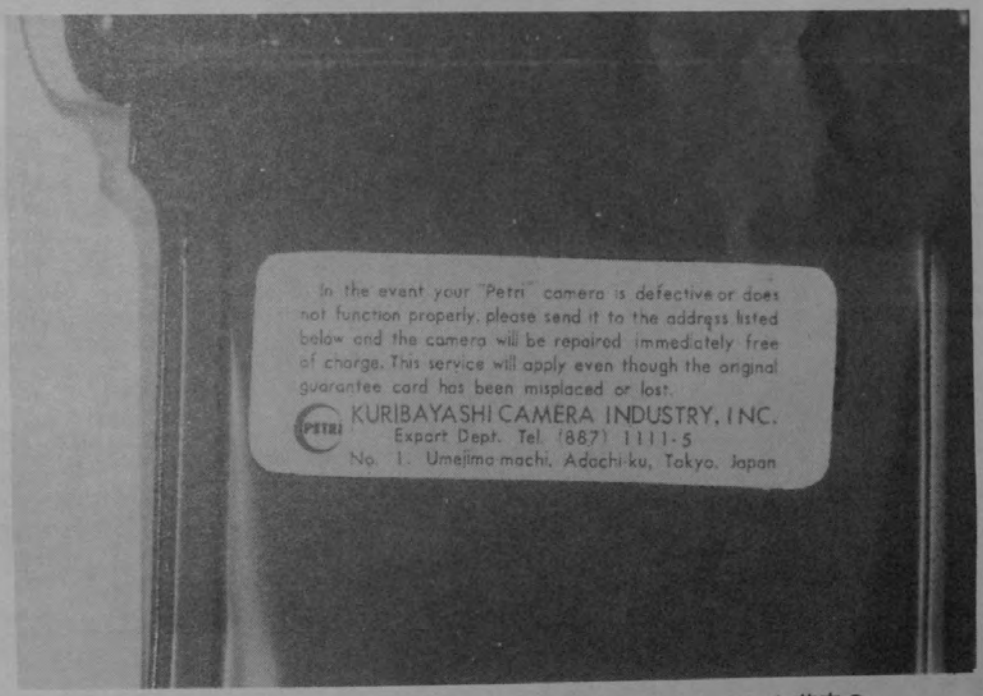
⑮　ペトリカメラの起承転結３代（台）記
左より，1946年いち早く「クリカメラ」で再起し，1963年セブンで頂点を極め，1977年無念やＭＦ－１で滅亡した。

⑯　アメリカ人好みにダイレクトカットデザインされた対米輸出カメラ群。
左よりアンスコマークＭ（リコー999）グラフィック35ジェット，トプコンＲＥスーパー（ペセラートプコンスーパーＤ），中央ペトリフレックス７。

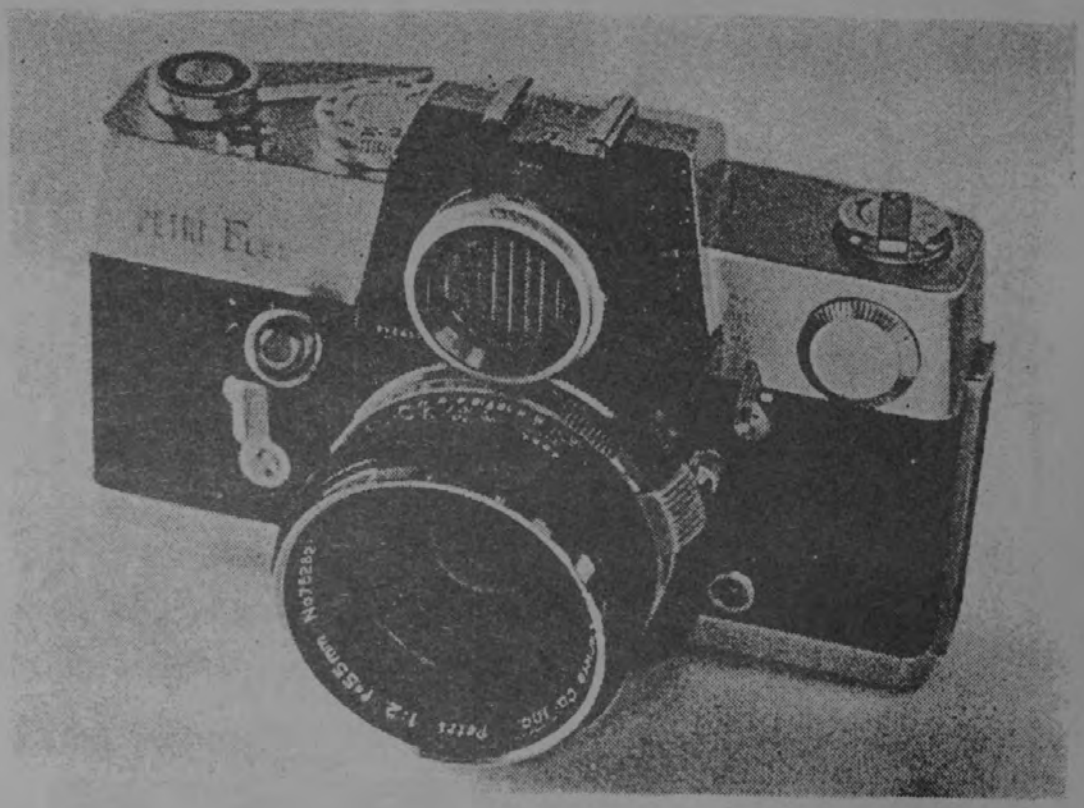


⑰　東西ブルズアイの顔合せ。　だが1958年のコンタレックスＩ型と較べると，５年のハンデーをもらっていてもなお，落差が大き過ぎたようだ。

⑱　cds露出計連動式１眼レフの発売順位
前列左から　ミノルタＳＲ－７，ヤシカＪ－３，ペトリフレックス７，
後列　トプコンＲＥスーパー，キャノンＦＸ，アサヒペンタックスＳＰの順



⑲　ペトリフレックスセブンＡタイプの裏蓋に貼られていた英文の
サービスステッカー。（本文参照）



ペトリフレックス7の主な性能

レンズ・ペトリ55ミリF1.8（または2.8）完全自動絞。バヨネット式ペトリマウント。最近接撮影距離は60センチ。

シャッター・FP、B、1～1/1000秒までの一軸不回転。セルフタイマー付。

ファインダー・ペンタプリズム使用一眼レフ、ミラーはクイックリターン式。フレネルとコンデンサー併用で倍率は1.95倍。

露出計・CdS使用ゼロメソッド式。水銀電池MD型1.3V使用。連動範囲はASA100に対してLV4～17まで。指針はファインダー内に表示され、標準レンズには絞の調節にも連動する。

その他・フィルム巻上げは上部レバーによる。フィルムカウンターは自動復元式。

価格・未定（予価ケース込みで F1.8付36,000円 F2.8付34,000円）

ペトリフレックス7は外観写真でもわかるとおり、シャッター、絞に連動するCdSメーターを内蔵した35ミリ一眼レフで大型の露出計受光窓がツァイスのコンタックスのようにペンタリズムの前面に配置されている。またCdS用水銀電池はシャッターレバーを巻上げるとセットされ、シャッターを押すと回路が切れるようになっており、無駄な電池の消費を防いでいる。フォーカルプレン機構をこれまでのこの字型から四筒直列式に改ためて組立の簡略化を図るなどのコストダウンにつとめているといわれる。

（参考） 写真工業1962，11月号に発表されたペトリフレックスの試作機の全貌。

本稿Aタイプと比較すると，レンズがF 2付黒胴，シャッター白ダイアル，メーターカバーレンズボード黒塗り，電源スイッチ付？，アイレット無，ネーム字体等，多くの相異的が認められる。

「主な性能」説明文とも異る点があるのでこの試作機は発表よりずっと以前にすでに完成していたのではないだろうか。